

京都大学生協同組合

理事長 川添 信介 先生

非常勤理事の役割

川添先生は今年4月から京大の文学部長に就任され、京大生協の理事長を終えられる。長い間ご尽力いただき、感謝の気持ちは尽きない。お忙しい中気持ちよくインタビューをお引き受けいただいた。質問に対して言葉を吟味してお答えになる姿は、今までの理事会でも一貫していた。インタビューの中で感じたことは、大学生協に対する先生の姿勢であり、非常勤理事のあるべき姿を教えていただいたように思う。京大生協に川添先生がいてよかった。

名和 川添先生は現在も京大生協の理事長を勤めておられ、よく存じ上げていますが、まずインタビューの冒頭に先生の生い立ちからお話を伺いたと思います。

川添 私は1955年（昭和30年）、佐賀県唐津市で生まれましたが、父はもう亡くなりましたがごくふつうの地方銀行員で、母は今も唐津で健在ですが、近くに住んでいる妹が面倒を見てくれています。

名和 銀行員の場合、一般的には同じところにおられることは珍しいと思いますが。

川添 父は佐賀銀行に勤めていましたので、もちろん県内の異動はありましたが、それほ



ど遠くに行くことはなかったと思います。福岡市が一番近い大都会でしたが、私が幼い頃に父が当時片道1時間半近くかけて通勤していたことは記憶しています。いずれにしても父は家からそう遠くはなれたところには行っていませんでした。したがって今に至るもよく知っている土地といえば唐津と京都だけです。

名和 唐津といえば「虹の松原」が美しくて有名ですね。それから唐津城や「唐津くんち」も知られています。先生はお祭りの時、曳山ひきやまを担いだりされたのでしょうか。

川添 祭りには曳山がでて賑わいを見せ、わくわくしたのですが、私自身は直接かかわっていたわけではありません。つまり京都の祇園祭でも同じことがいえますが、それぞれの町が曳山を管理していて中心的役割を担っているわけです。そうした町で育

った友人たちもいて祭りになれば「命をかける」ような盛り上がりを見せていました。わたしは唐津の中でも少し離れた地区の生まれで、曳山を引くことはできませんでした。その地区に祖父は若くして山から出てきたわけです。唐津という土地は港街でもあり遊郭もあったようですが、生前祖父はその街で、今で言うところの「タクシー」事業を始めたようです。その後母や妹は本籍地を唐津に移しましたが、わたしは今でも本籍地登録を七山村から移していません。もっとも 2006 年の市町村合併によって今では唐津市七山といますが。

名和 当時、自動車を使って事業をするという点でおじいさんはいわゆるハイカラな人だったそうですね。

川添 本当の話かどうかはわかりませんがそう聞いて育ちました。わたしが生まれる前の時代、唐津は石炭の積出港として栄えたようです。もちろん今は廃れていますが。

名和 わたしはそのころの映画「にあんちゃん」(1959年、今村昌平監督作品)が頭に思い浮かびます。戦後の炭鉱町で貧しい子どもたちが健気に生きていくという物語で、若かりし頃の松尾嘉代が出ていた映画です。唐津は佐賀とも鉄道でつながっていて文化の面でもかかわりがあったと思います。話は変わりますが、京都府生協連会長の上掛先生は北九州・八幡のご出身で、子どもの頃、炭鉱の三交代制労働のもとでまわりの大人が昼間寝ているので騒いだら叱られたというエピソードをインタビューで語っておられました。先生はそのような体験はありませんでしたか。

川添 私が育った頃「炭鉱街」という時代はすでに過ぎ去っていました。したがって石炭積出港としての賑わいという印象はなく、良く言えば落ち着いた、ある種の観光地と



いう雰囲気でした。今でも「おくんち」は別にしておきに面白いことは特にはない土地だと思います。そうしてずっと唐津で育ちました。当時通った唐津東高校はお城の下にありましたが、昔の藩校の流れを汲んでいて立派な門構えを誇っていました。ところが何時しかその場所を早稲田が買ってしまい、わたしの母校は今では

^{へんび}辺鄙なところに移って現在公立の中高一貫校になっているようです。なんであんな素敵のところから移ったのだらうと思いますね。ちなみに同じ佐賀でも鍋島藩は外様でしたが唐津は譜代の殿様がおおり、気質はそれぞれ違っていたのだらうと思います。

名和 全国どこをみてもお城があったところには地域で一番の高校があるそうですね。その後先生は京都大学に進まれることになりましたが、最初から京大進学をめざしておられたのでしょうか。

自ずと京都大学へ

川添 たしかに京大以外は受験しませんでした。ただ、なぜ京大に進学したかについての明確な記憶はありませんが、文学部に進むという事は決めていました。今でも一緒だと思いますが、高校では哲学を教えられなかったので「哲学を学ぶ」というはっきりした意思はありませんでしたし、むしろ大学に入ってから哲学をやる自覚が芽生えてきたと思います。ただ今から思うと本はたくさん読んだと思いますし、京大の先生の本もよく読みましたので自然と京大の方向に向いてきたのかもしれない。いずれにしても東京に行くというイメージはなかったですね。

名和 わたしも学生の頃に後の生き方に影響をうけた覚えがあるんですが、哲学者の田中美知太郎さんの弟子の森進一先生は父親の友人で、わたしにとって当時の森先生は先生ではなく「おじさん」という存在であり、そういう恵まれた関係のもとで、下宿していた時へロドトスを読んだり田中美知太郎さんや藤沢^{のりお}令夫さんの話もよく聞きました。



ところで先生が高校時代によく読まれた本はなんでしょうか？

川添 いわゆる戦前の西田幾多郎を中心にした「京都学派」から、新しい京都学派といわれた京大の人文研の先生の本、また文芸評論家の唐木順三、彼が哲学出身であることは後で知りましたがとにかく高校の頃よく読んでいました。また文芸春秋の巻頭言に書いていた田中美知太郎は毎号読んでいました。

名和 京大に入学されてから哲学を学ぼうと思われたということですが、それはなぜだったのですか？

「個」の存在に目覚める

川添 前に『水とワイン』という本の前書きに書いたことがありますが、4～5才のころでしょうか、当時住んでいた自宅の2階から道を挟んだ向かい側によく知っているおばさんの姿が見えたんです。その時、自分という人間と向かいのおばさんとは知り合いだが全く別の個人同士であるということをヴィヴィッドに思ってしまったわけです。つまり自分の手をこうやって動かすことはできても相手の手を動かすことはできないということです。そんなことは当たり前ですが、今思うと幼い自分が『人間は一人ひとりばらばらの存在で心も一つではない』と気づいたのだと思います。心理学的には単なる「自我の目覚め」に過ぎないということでしょうが。そういうこともあって後に哲学の道に進むきっかけになったのかもしれない。

名和 祖父や父親の生き方や考え方についての影響はありませんでしたか？

川添 それは特になかったと思います。

名和 大学に入られてからどのような勉強をされましたか？

川添 さきほど言った向かいのおばさんの話に繋がるとは思いますが、最初は 17 世紀フランスの哲学者デカルトのいう「我思う、ゆえに我在り」、ラテン語で『コギト・エルゴ・スム』とありますが、哲学のスタートラインであり近代哲学の始まりと位置づけられています、そのこととさっき言ったように「自分と他者」、自分と別のものがひとつにはならない、そういう考え方でもないと解釈できるわけです。それがデカルトの哲学のすべてというわけではありませんが、そこから出発点である、という哲学です。

名和 それは他者に対する人間の関心が強いということのあらわれでしょうか。

近世から中世へ

川添 そういうことになるのでしょうか。わたしは修士課程くらいまでは一生懸命デカルトを研究していましたが、博士課程に進むときに今と違って勉強の仕方には余裕がありましたから専門領域を変えても文句はいわれなくて、現在もやっている 13 世紀にさかのぼったヨーロッパの中世哲学に方向転換しました。それはデカルトにシンパシーがあると同時に反発もあって、デカルトのような



「自分」というものから哲学が始まるというものではない哲学、むしろアンチデカルトの哲学を学びたかったからです。とはいってもそれまでデカルトには深い影響を受けてはいるんですが。

名和 そうなると対象の幅がかなり大きくなっていくわけですね。キリスト教というものが背景に大きく関わっていくのですか。

川添 近世のヘーゲルやカントの哲学をやろうが中世をやろうがやはりキリスト教というものの知識をもっていることは必要ですが中世哲学をやろうとすればなおさら重要になるということです。

名和 そうして先生は中世のトマス・アキナスを研究されるわけですが、その面白さというのはどこにありますか。

川添 どこが面白いかというところでは生協と関わるものがあるのかもしれませんが、単純化していうとデカルトのような哲学では、まず個人があって次に個人同士がどのように関係したらいいのかという順番で考えざるをえない、そのうえで自由や権利を基礎にして共同体としての社会がどうあるのか、理屈の上でそういう順番になっているということです。ところが中世の哲学、トマス・アキナスがその代表かもしれませんが、順番が逆転している面があって、ある種全体主義的な面があるかも

しませんが、共同体という全体が先にあって、そのなかで「個」というものが意味づけられます。どちらがいいということではなくそれぞれ違ったものの捉え方があるということです。デカルトの時代以降はその考え方が続くわけですが、わたしはデカルト以前の中世の社会と個人の捉え方を見たいと思ったわけです。

中世に見る協同組合の原型

名和 寄付講座の「協同組合論」で先生に講義を担当していただき、中世の大学の成り立ち



ちをお話いただきましたが、当時の大学構成員の相互扶助組織である「国民団（ナシオ）」と「ネーション」とがどう重なっていくのかは別にして現在の大学生協の役割とどう繋がっていくのか大変興味深く伺いました。そうしたことは先生が大学生協でご活躍されるきっかけに繋がっていたのでしょうか？

川添 後づけの理屈としてそういえるのかもしれませんが、わたしは中世大学の歴史の専門家ではありませんが、わたしが専門とする中世哲学が成立した場としての大学がどういうものであるかという関心はあります。近世や近代と違った中世の社会のありかたには近代社会の協同組合のあり方と繋がる面があると思います。「近代的でない協同組合」というものがあるとすれば、また、近代を越えた価値というものと結果的に重なっているかもしれません。明確に意識して「生協に関わろう」と思ったわけではありませんが。

名和 協同組合そのものはデカルト以降の近代の知恵の中から生まれてきたものだと思うのですが……。

川添 「新しい」ということでいえば、近代社会の中でメインストリームからはずれたところから、近代的なものに対するアンチテーゼとして生まれたとすれば「新しい」といえるでしょう。しかしさかのぼれば中世にその原型があったといえると思いますし、その点では新しくないともいえます。中世哲学を学んでいる立場からすれば、人間はそんなに新しいものは思いつかないとも思います。

名和 先生の授業のお話を聞いたときにラテン語を少しづつ読んで体得していくということで京大の授業らしいなと思い、中国語を教えているわたしは、「訓話学^{くんこがく}」をされているんだなと思いました。

川添 訓話学といえばネガティブに聞こえますが、決してそうは思いません。文学を学ぶ場合には。

「うるさい理事」に徹する

名和 先生は新聞などでも『京大に生協があってよかった』と書かれるなど啓蒙的な文章をよく拝見させていただきますが先生のお仕事の一環として位置づけておられるのでしょうか。

川添 京都新聞の「ソフィア」というコラムがあるんですが、知り合いの記者から頼まれて書いています。そういう記事を書く時には何がしか啓蒙的なまえがあって書いてるのは事実ですね。1000字程度で文章をまとめるのは難しいですが。

名和 先生が生協の役員になられたあと会議の場でご一緒して驚いたのは、先生がわからないことを理解できるまで徹底してお尋ねになったことです。

川添 自らがわからないことを理解できるように質問しなければ前に進まないと思いました。わたしは何が議論され目指されているのか理解したい、得心したいと思っていました。

名和 そうした先生の行動によって他の参加者が議論の本質を見極めることに繋がっていったと思います。

川添 わたし自身「うるさい」理事だったと思っていますが、生協に長く携わっている人が「あたりまえ」と思ったり疑問を持たないのであれば、外から見た目でこそ意見を述べるということが大事であると思っていました。

名和 先生のおっしゃっていることはまさに非常勤理事としての大事な役割だと思います。ところで先生が京大生協の理事長になるいきさつをお聞かせください。

川添 このインタビューを前にメール履歴を見て振り返っていたんですが、最初は2007年に副理事長に就任しました。当時、平さんが専務理事の頃で、半年後には中森さんと入れ替わりましたが、詳しい経過は忘れましたが、突然電話があって話が出たんですが、その時田邊先生と一緒にこられたのを覚えています。田邊先生とわたしは京都大学職員組合の役員をやっていた時期があり、わたしのことを知っておられたので要請がきたのだと思います。



大学法人化のなかで

川添 大学の法人化のときに京都大学職員組合の中央執行委員長として2004年から2年間で、若林先生とタッグを組んで仕事をしました。そのあと1年のブランクののち『組合の仕事が終わって暇になったんだろう』と思われたのか、2007年から生協の役員

になったのがはじまりでした。

名和 そうすると先生は教職員組合時代から目立った存在だったのですね。

川添 わたしは京大に来る前の大阪市大時代も京大に来てからも職員組合の組合員でしたが、京大で回り持ちの文学部支部長をやったくらいで決して積極的とはいえませんでした。ところがそのあと中央執行委員長を頼まれて、つい引き受けてしまったという経過です。

名和 やはり先生は課題に対してきっちりと対応される姿勢を元来お持ちだったのですね。

川添 当時、国立大学の法人化によって労働環境が激変するという問題があったわけです。従来の国立大学の職員組合から労働法が適用される職員組合に変わったわけですから過去の知識や経験がない私でも通用するのではないかと思われたのかもしれない。



生協のほうは 2007 年から 2 年間生協副理事長をやったあと 2009 年から理事長になりました。副理事長や理事長をやったことは、他の課題をやるまえにまず赤字をなんとかする必要があるということでした。

教職員の非常勤理事の役割は、大学と生協の関係を緊密に結びつけることであると最初から思っていました。しかし具体的なプランを持って理事になったわけではありませので、どうしたら必要な手助けができるかというスタンスでした。

団交で直^{じか}に声を聴く

名和 京都・滋賀・奈良の大学生協の団交があったとき、同志社の大鉢先生らと一緒に参加していただいたことがありますね。そのとき川添先生が生協職員の側の要求に対して難しい局面の中で正面から真摯に向き合っておられたことを鮮明に覚えています。

川添 わたしは京大生協の役員として、パート・正規を含めて職員さんとの団交を一度も休んだことはたぶんありません。それはわたしが理事長として何かを団交で引っ張るのではなく直にみなさんの話を聞きたいと思っていたからです。

名和 先生が非常勤理事としてこれまで果たしてこられたいきさつについて伺います。

川添 かつて大学生協連の「Univ Coop」にも書いたことに尽きますが、生協職員が大学との結びつきをどう捉えているかがよくわからない、言い換えれば大学との関係で生協職員が縮こまっていないかという認識を持っていました。生協職員自身が自らの役割の重要性を認識していなかった、生協職員のみなさんにもっと自信を持って

もらいたいと思っていました。そこで大学との協定締結によって生協の位置づけを明らかにしたわけです。

名和 生協職員自身の構えかたについては京大だけでなく全国の生協共通の課題であると思います。先生は一貫して非常勤理事としての役割を發揮し続けられたと思いますし、そのなかで学内においてナシオの存在を明確化されたとも思います。

川添 1月に生協として京大総長に学生委員長らと一緒に新年挨拶に訪れたとき、松本総長が『大学と生協は一体化したんだから』とおっしゃって、さすがにそれは違いうだろうと思いましたが、理念的には違うものの大学の側がそこまで生協の位置づけを評価されていて驚きました。協定締結後、大学から協定書にもとづいて仕事を言ってくることも増えているようです。

名和 京大以外の大学にも同様の協定づくりが広がるよう努めたいと思います。最後に今後の大学生協のありかたや望まれることについてお伺いします。

常に構成員の思いを

川添 望むというのは何か欠けているから望むということになります。京都大学法人与緊密な関係を持つことは一つの目標ではありましたが、なぜ必要かといえば学生はもちろん教職員、生協職員を含めて大学構成員全体のコミュニティが快適な場所になることです。そのために協定が必要になり、その結果最終的に過ごしやすく誰でも成長できる大学コミュニティになることが目標のはずです。

そのために何が欠けているかを知るには構成員が何を望んでいるかを捉えきれていないということを常に認識していることが必要です。そのためいつもアンテナを張って構成員の思いを受け入れることが大事ですし、その姿勢がなくなると困ります。ところが現実には二の次になりがちです。組織の自己保存が自己目的化しないように努めなければならないと思います。

非常勤理事というものは常に生協の存在意義をいつも思い起こさせる役割を担っていかなければならないと思います。

名和 大学生協の存在意義を高めるため一貫して非常勤理事の役割を發揮してこられた川添先生に感謝しつつインタビューを終えたいと思います。ありがとうございました。

(2014年3月26日 京都事業連合にて)